

草津市立矢倉小学校通信 令和2年6月1日 NO.4



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

3密にならなくてもいいように・・・

緊急事態宣言が解除された。なのに、日々の生活はずいぶん変わった。これまでは、なんでもなかったはずの場面で、人とかかわりが断ち切れ、疎遠になったと感じるのだ。

たとえば、スーパーのレジにかかった透明ビニルシートは、病院の受付にも、草津市役所のカウンターにも、さまざまな場面で、やりとりすべき相手との仕切りとして設けられるようになった。お金の受け渡しもトレーを介して行われる。これまで、相手とほとんど直接的なモノのやりとりをしていただけに、今のこの状況が長く続き、やがてあたり前のこととして、生活に根づくようになってしまうとうどうなるのだろう。そこで育った子どもにとっては、相手の手と、じかに触れることは避けねばならない事態となる。ため息とか鼻息とか、歯ぎしりとか、そんな息遣いや気迫を感じるコミュニケーションのあり方は、それこそ国語の時間に、「昔の人はね、こんなくらし方をしていたんだ。」と、理解すべき心情表現の場面などという、そんな扱いになるのだろうか。

子ども同士のかかわり方、休み時間のようすも、活気もどってきたとはいうものの、100%でなく、どことなく静かなものになっている。おしゃべりは禁物で、歌も歌ってはならず、腕を組んでダンスをしようものならすぐに引き離されてしまいそうな無言の圧力が、子どもたちの学校生活に重くのしかかっているからだろうか。そんなふう感じられれば感じられるだけ、私としては、どうにかして、そこに本来の心がかよいう場を、静かさの中になんとかつくりだせないものだろうかと思えてくる。

休み時間、生徒指導を担当されている先生が、校内放送で「これから、みんなといっしょにパブリカをおどりませんか。運動場で待ってます。」と呼びかけてくださっている。その放送が、心に響いたのだろうか、ある日、登校直後、わざわざ私のところにやってきてこんなことをつぶやいた。「校長先生、今日も長休みの時、パブリカあるかなあ。おどるって放送してもらえる？」と。私はもう、うれしくてうれしくて、「もちろん、きっとあります。とうぜんです。」と答えていた。すると「ああ、よかった。」と、いそいそと教室に戻っていくのである。そのうしろ姿が、どことなく小躍りしているようで、「どうぞ、どの子にもこんなよろこびがありますように。」と願わずにいられなかった。

3密はダメだというのは、確かに正しい。だからこそ、私たちは、その3密に気をつけなくてもよいようにしながら、楽しみにすること、頼りにすること、受け入れることなどといった心のつながりを生み出していきたい。